

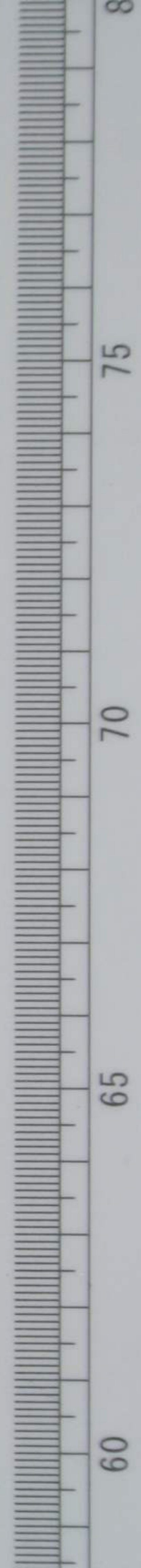
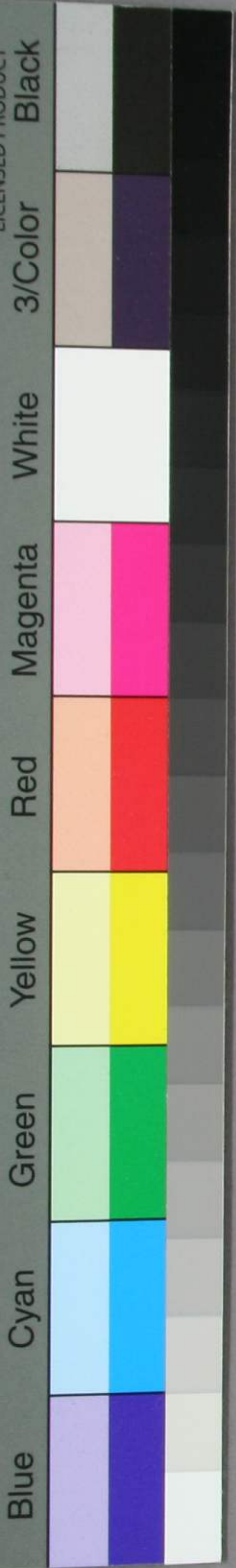
新體詩集

細越夏村著

靈 笛

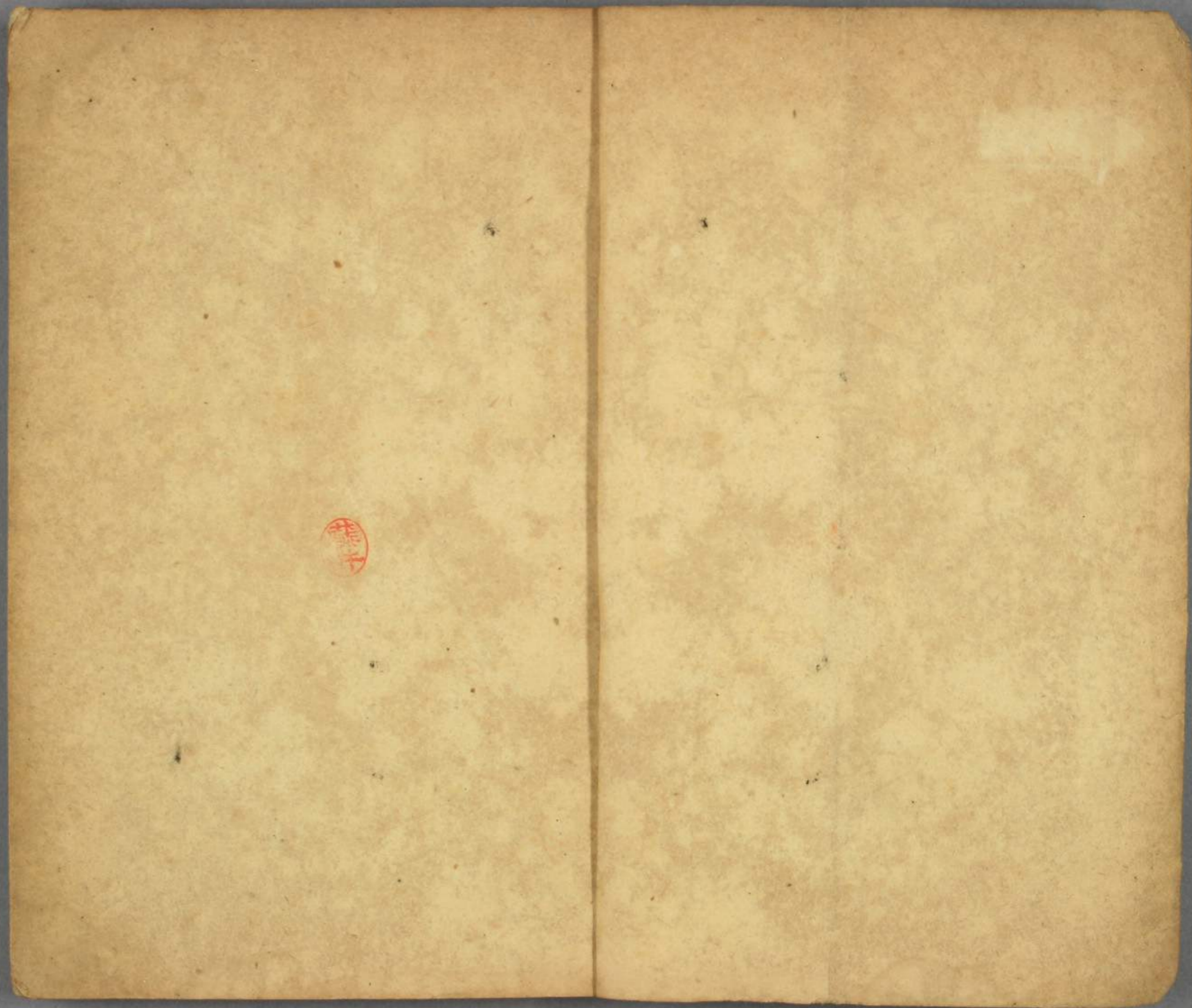


東京
日高有倫堂藏版









序

予の詩を作るや、元より、主義の爲に非ず、風
教の爲に非ず。唯、時ありて、われど故知らぬ
あこがれ心地を、胸に湧き立つ感想の堰きあへ
ず、執りたる筆の端の動きに、たのづから成り
行く文字の連れる跡ころ、此集を満たせるもの
なれ。是或は詩に非らざるべし、是或は詩なる
べし。そは偏に世の評家に任かす、又何ぞ關せ
んや。

予や、唯、わが歌ひし所の真情、幽趣、或は、

奥秘、優婉の、世の惱める心を慰め、渴ける靈
を潤すもの無きやを思ふ。これ、予が敢て、此
粗糲なる一小冊子を公にする所因也。

明治三十九年一月下泮

下戸塚村の僑居にて

著者誌

目次

靈 笛	一
花 片	二三
沼の底	二六
みね子	三五
廢 兵	三八
道しるべ	四三
あこがれ	四九
こまに	五二
愛	五四
沈 黙	五六

花賣	五八
秋	六六
古壺	七四
たもかけ	七八
いさり火	八〇
君ころは	八一
人へやる扇に	八三
幻想	八五
黄金小篁	八七
金鼓	八九
閉ぢよ早く	九四
愛の門より	九六

鏡夕浦雜詠	九七
紅文字	一一三
もだね	一一七
古井戸	一二一
春の日	一二八
雲鏡	一三一

靈
笛

靈
笛

細
越
夏
村

瑪瑙の臺滑らに、
琥珀の櫛に身をよせて、
琥珀の櫛に身をよせて、
琥珀の櫛に身をよせて、
琥珀の櫛に身をよせて、

靈
笛
の
音
は
空
を
穿
ち
抜
け
て
去
る
か
ら
い
は
な
し
の
如
き
と
い
は
れ
る
が
、
こ
の
音
は
心
を
打
つ
と
い
は
れ
る
。

王は 戎衣じゆいの 片袖を
脱ぎ くつろげし 右の 手に
舉げし 夜光の 盃は
黄金こがね きらめく 美酒びよの
溢るゝ ばかり、美女くわしや
酌み まゐらせと、今宵は
得も 酔ひまさで、霜れく
鬢びんの 白髪しろがみの 増まし 見ぬつ
千疊せんじやうの 青玉殿せいぎよくてん
群臣ぐんしん 額かぶかみを 垂れて、
死の 宮も かくや と ばかり
寂寞じやくまくの 領する 所、

明月 雲を 開けば
白光びやくくわう さつと 逃にげつて
野の 如き 床とこを 流れぬ。

折しも、妙たぎの 笛ふえの 音ね。
霧 ふくむ 氣を 波立なみだたせ、
昂たかれば、雷神らいじん
雲を 蹴かつて 風に 駆かり、
沈しづめば 蒼龍そうりゆう
海底かいぞうに 潜ひそむ が 如く、
沈痛しんとう 悲壯ひさうの 一曲いっく
遠く 近く、神韻しんいん

漂として 搖曳す、
群雄 感 極まつて
聳やかす 鎧の 袖
相觸れて 殿上の
こゝ かしこ 憂々の 音
王侯 眉を 擧げて
「やよ、端近き 武士、
かの 笛の 主を 率て 來よ
紅欄に 凭れる 若武者
君命を 畏みて
飛ぶ が 如 階段 降る
間も あれや 百尺の

鐵壁の 外を 駈ぬ。

程も 無く、 燦爛の
王坐に 近く、 若武者
ひれ伏して、 御感の
恩言に かしこむ 側
笈 負へる 白衣の
老行者 金剛杖を
突き 立てし 六尺の
大軀は 仁王 非ずば 不動
胸を 蔽ふ 銀髯 長く
颯々と 風に 搖げり、

王侯 莞爾と 笑み 玉ひ、

聖者よ、卿が 笛の 音は

何なれば、かは悲壯なる

老仙 さながら 裂けたる 鐘の

音聲 緩く、明君よ、うは、

英雄 敵を 破つて、

屍丘 血河の 最中に、

無量の 感を 謠ふてふ

一曲の 古調なればぞ

英雄 敵を 破つてとや

繰返し、又 繰返し、

沈吟に 俯向ける

王 慨然と 顔を 擧げ

「あゝ、敵破る 敵破る

英雄もがな、あゝ、

聖者よ 聞かれよ、我

干戈を 交へて 七歳、

暴慢 非禮の 鄰邦、

何事ぞ、旗鼓 日に 盛んに

正を 助くる 神なきや、

戦ふ 毎の 我が 敗

武勇に 古き 我國、

あゝ、父祖の 威稜を 奈何、

聖者よ 我 熟々
御相を 観ずるに、
眉宇の間 靈氣 溢る、
願はくば 軍師 となつて、
三軍を 指使せずや。

老仙 心地 よげに
白衣の 肩を 高う
「あなかしこ、異常の
眼識の 程 れろろし
老餘の 瘦軀 何物
要ねばす 君にしあらば、

馬前に 斃るゝ 榮を 享けん
さらば。とばかり 下す 笈の
扉 開けば、燃ゆる 緋の
直垂 伽羅の 香も 高う、
黄金 造の 軍配に、
吳孫 六韜三略の
淺黄錦の 卷の 物、
老仙 王を 顧みて、
「勝算 見ませ、茲に 在り、
敵の 運命、はゝゝゝ、
あな 笑止、あな 笑止、

天に謝す、はからずも、
此宵を、かくはして、
聖者、否、維幕の師、
尊き此一人を
與へ玉ひし神慮を。
王侯、諸手を胸に、
仰向けし額に分れて
肩の邊にさやくと
金冠の瓔珞の
揺らぐ音に、満殿の
將士思はず手を組み、
月明き空の方へ

幾百の睡据ゑたり、
老仙、笛を把つて
聖盟の曲、蕭々と、
行く雲も遇まれり。

王侯、我に歸れば、
玉顔の麗しう
莞爾と笑を湛へて
軍帥よ、願はくば、
此方へと躬を先
玉榻の上より起し
燦爛の王衣を曳いて、

廻廊の 幾うねり、
青石の 階 攀ちて、
天主閣 百丈の
樓上に 仙者を ひいて、
月光 漂渺の 彼方、
大江の 彼岸に 淡く
涯しなき 緑野を 指して
軍帥よ、 軍勝たば、
願はくば、 彼の 沃土を
静養の 地に 領されよ
薄謝 たゞ、
小國の 貧を 耻づ。

江の岸 十里、
白蓮の 開く 音に
白鳥の 醒むる 朝あけ、
老仙は、 青毛の 駿馬を
階の 根に 寄せて、
緋總 垂る
金襴の 袋に 納れし
靈箱を 王に 献じつ、
軍勝たば、 敵退かば、
るの 利那 此 笛に
れの づの 音 妙ならむ

願はくば、是を先づ
衰龍の御襟に秘めよ、
さらば、君我行かむ、
唯、王よ、笛の音を、
夫れ、待ちませと
野山に續く三軍の
黒潮次第に遠く小く。

こは 何の 瑞兆ぞ
夕榮の 光 長く
漂渺と 金色に
煙る うの 深みより

一條の 桂の 枝
空を 切り、 虚に 鳴つて
玉殿の 床の 上に
颯と 落つる 間もあれ、
王が 胸なる 靈笛は
皖朗と おのづから、
妙曲の いみじさや、
王侯は 歡喜の 餘
跳び あがり、 こととれば、
暮れ かゝる 遙の 彼方、
山間を 雲の 如
歸り 來る 軍勢の

凱旋の 旌旗
翩翩と 勇しう。

幾千の 篝火
煌々ど 相映じ、

夜を 知らぬ 明るさ、

百萬の 勇士

戎衣を 解いて、

戦勝の 盛宴に

歡樂 今や 闌

老仙 襟を 正し

徐ろに 王に 云ふらく、

老拙 天祐に 依りて、

幸に 軍に 勝ち、

敵勢は 將を 失ひ、

遠くも 潰い 去りぬ、

茲に 我務 終へたり、

願はくば、 かの 美土を 得て、

閑雲夜鶴、
悠遊の 餘生を 享けむ。

君侯は 玉榻に 頽れ

醉眼を 怪しく 見張り、

からくと 冷笑ひ、

こは、何を 老帥らうすい

は、こや、聖者しやうじやよ、

毫こせりな、呆ほうせりな、

かの 沃野わくや ころ

我邦わがくにに によなき 寶庫たからぐら

財穀さいこく の 産

數かずを 知らず、

今いま ろを 卿けいに 呈ませば、

は、賢明けんめいの 聖者しやうじやよ、

我國わがくにの 支持しじを 如何いか。

語りも 終はつへず、王者わうじやは

昏眠こんみんの 厨くを 高く。

夜は 更さらけて 露つゆ 満みちたり、

兵へい 散まじ、篝火かきり 消きえて、

月つき 落おちし 闇やみの 城裡じやうり

蕭々しょうしやうの 松風しょうふうに

聽きけば 無常むじやうの 響ひびあり。

老仙らうせん 天てんを 仰あやぎ

浩嘆こうたんの 久ひさしうて、

豆大まめだいの 草野くさの、何物なにもの、

はしたなき 小慾せうよく、

義ぎを 捨すて 恩おんを 忘わする、

貪婪の 豎子、あゝ、
危いかな 此國、
さもあらばあれ、又
何ぞ 闕せんや、さらば、
雲水 悠々の 中、
放浪の 懐をやらむか。

漠漠の 雲 暗く、
もの 寂びし 午すぎ、
老仙は 舊の 白衣に
笈 負ふて 飄々と
城を 出で、 一葉の

扁舟を 江に 浮けて、
流水の 誘ふに 任せ、
恬淡として 去るを
將卒 悄として 岸邊に
老帥の 影を 惜みつ、
柳蔭に 並み 立ちて、
彌遠る 舟 慕ふ
折からに 一團の
奇火 熾に 燃えて
天より 落つと 見る 間に
對岸は 見渡す 限り
渦捲き 狂ふ 火の海

すさまじき 奔騰に
千頭の 緑野は
忽ち 洵る 無涯の
砂漠もや、かくと 計り
焼野原 とこしへに
礪确の 砂上
一草の 緑だも 無し。

花片

美の神、絶ず 刻々、
天上の 百花 盛りし
靈籠を 胸にして、
虚空を 舞ひつ、優手に
持ちあまる 花片を
人の 世 さして 投げ 行く。
血潮 薫る 聖き
若き 胸 のみにぞ、
投げられし 花片は

停まりて、其處に、
人の身の墓 被ぐまで
萎まずて、戀の
美しき 情思を 醸す。

世の 羈絆、寒風

——うば「利」より 吹く——

戀の花 つんざくと
習俗の 砂塵を 捲きつ、
健全と 幸福てふ
ねはけなき 名鏡ひて、
うが 樹つる 「道」てふ 旗は

上下か こゝに 二千載

美 若人が

斷腸の 血を 吸ひて、
利の 巷に 高う はためく。

理と云ふか、律と云ふか、
利に 敏き 賢てふ 枯老
何時の 世よりか、敢て、
ほしいまゝに 規矩を 作り、
うが 頑き 冷きをもて、
天の賜與、自然の 快樂
宇宙の詩 美の極致を、

測り 証ゆる さかしら。

うつし世、肉の動く 瞬時を

誇らしげなる うの凱歌や、

むしる、狗猫の 橋慢

憫笑に 値せんや、

法よ、繩規よ、利得よ、

卿が 冷銳の 刃は、

熱かき、軟かき

若人の 肌膚を

自らの 血をもて

碧黒に 塗り蔽はせぬ

わゝ、されど、相思の、

相抱の 靈精は、

天苑の 故郷に 再び、

燦爛の 花と 咲いて、

常春の 陽光に

漲り 燃る 薫香は、

見よ、山野 河海と 共に、

國亡ぶるも 君變るも、

地水の 續く 限り、

人畜の 相住む 極み

遍満し、 磅礴す。

沼の底

(一)

いづこより 落ちたりや、
わが影と 相並みて
水の 上に 此の影、
花ならぬ、星ならぬ、
花よりも 美しき、
星よりも まばゆき、
おゝ、妙の 此の影。

緑葉に かこまれて、
世を 遠き 石に 寄り、
花野の 奥の 隠沼、
寂寞を 吸ふ 眞清水に
笑む 此の 影に 見とれつゝ、
うつけ 心地に 春の 日は
霞に 昏れて 月煙る。

(二)

ろの 影の ゆかしさに、

うの 水の 清けさに、

岸 近き 浅みに

いつしかも 降り立てば、

うの 影は かなたに

うの 水は いや清う。

うの 影の ゆかしさに、

その 水の 清けさに、

溺るべき 人間の 身を

忘られて いや行けば、

うの 影は 又も かなたに、

うの 水は いや、清うて。

今は つゆ 恐れも あらず、

美し、 かの、 ゆかしの 影を

抱かむぞ 唯の ねがひ、

あこがれて 追ひ 行けば、

かの 影は いや、 ゆかしう、

その 水は いや、 澄みたり。

(三)

あこがれて、 うつたへに

追ひ行けば、 かの影は

あなうれし、ろこに 止りて、
は、笑は 我を 招ぐらし、
ひた走せに 波を 亂して
ひしど かの 影を抱けば、
あゝ いみじ、あな くわし。

恍惚ど、氣息せまる
我身を 緊く 抱きて、
かの影は いよく 沖へ、
眞清水は いよく 深う、
倏忽に 沈みしは
八千尋の 沼の底。

あゝ奇し、水の底に
人間の 身ながら、我は、
かの影と からみし まゝに
夢のごと 今も 生きたり。

おそろしや、思へば、
光 とゝかぬ 遠き 底の
こゝにしあるを、今又、
美しき 影に ひかれて
軟泥を 沈みかけたり。

うつくしき、思へば、奇しき
この影とだに抱かば、
軟泥の底にしる
あゝ、我は死なで在らむか。

みね子

人の御前に俯向きて、
ほの丹搦らふ雨の頬を
袂の端に埋めしより、
他に憚る苦艱を
寝られぬ夜半に髪噛みて、
晨の鬢のほづれ勝ち、
夕わびしらの小鏡に
色蒼褪めし面わかな。

十九を、ゆかしき 人に 病み
日毎、愁嘆に 細り行く
肩が 淋しき 戀衣、
悶れて ちぎる 袖口に
にじむは 紅か 唇の 血か、
情濃き 君が 熱き
涙の 玉の 滴りに
洗はるゝ 夜の 無かりせば、
生きて 悶れて 泣かむより
淵の 毒蛇の 餌たらし。 弱き身の、世に 強ひられて、

遂に 汚れん 身なるもの、
茨を 抱く おもひして
あだし 男に 添はんより、
法は 鎖を 卷かば 卷け、
道は 獣と 誣ひば 誣へ、
その かみよりぞ、我が魂を
納め まつりし 聖の宮――
君が 御胸に 額伏せて、
一夜の 春を 咲きて 散らなむ、

廢 兵

夏月 白く、濃緑の
雑木林を 揺り起る
夜の 冷風に 洗はれて、
烟る 光の 薄綾を
軟らに 被せし 遠村の
社を 載する 青芝生。
村の 若者 五六人
日毎の 業に 筋張れる
銅色の 裸體にて

月良き 宵の 娛樂に
素人相撲の 真最中。

月の 光の 接吻に
嬉し涙の 露浮けて
蘇り 笑む 夏花の
小徑を 分けて 怪げに
よるめき 出でし 人の影、
薄氣味 悪き 撞木杖
其れを 力に よろくと
興じ さゝめく 若人の
勇める 群に 近きぬ。

角力者等は 皆 駈け寄りて

片足人を 取り巻きつ

田舎濁聲 まち／＼に、

「善うこそ 此所へ、太郎兵衛、

三年前の 今頃は、

汝れこそ 村の 剛の者、

かなふ 者として 無かりしが、

御國の 爲の 戦闘に

今は 不具者の 身となりて、

再び 相撲 とる事も

出来なう 爲つた 不幸者、

なれども、其れも 國の爲

あきらめやれよ、太郎殿」

身ころ 強けれ、情には 脆き

百姓共は 涙聲。

折しも、風の さと薫じ、

綺羅の 袂を 靡かせて、

蓮歩を 移す 美し女を

右の 腕に 擁しつゝ、

金鷄勳章、從軍章、

參謀肩章、旭日章、

胸狭き迄、煌爛と

掛け 列ねたる 盛装の
一將校は、ほろ酔ひて、
葉巻煙草の 烟青く
跡に残して、悠々と
月野の 彼方、蒼茫の
銀波十里の 湖岸に
高く 聳ゆる 乳白の
洋館 さして 過ぎ行きにけり。

道しるべ

あはたし、狂ほしや、
この思ひ、たとはい、
夏の 日照の 最中を、
頰れたる 城跡の
煉瓦より 登る
陽炎に 類へんか。

頰の 落ち、肩の 瘡せ、
身の 細り、かくまで、

あゝ 此悶や 何
人 若うして 痛まし、
行きて 迷ひ 求めて 得ず、
心 倦み、氣 疲れ、
精 盡きて 上睨む
眼の 窪み 凄じう。

君問ひますな、何なれば
さは 悩むやと、君、
若人よ、君が 眼には、
微けく、遠く 近く、
見を隠れ、何となう、

唯 美しき 光なきや——

或時は 爛々の
焰 躍つて 眼を眩じ、
或時は 燃え盡さし
燈心の 火の 明滅し。

かくて、天照る 春の光に、
花 かぐはしう 咲き出る 見て、
夜半、野の 涯の 森の 蔭に
欠けて 淋しき、暗き月の
落ち行くを 見て、故とてはなき、
さあれ、止め得ぬ 熱き涙の

せき來る 度の 堪ぬ 感想。

迷なり、迷なるべし、

惑なり、惑なるべし、

さあれ、世は、人は、識者は、

この 悶 根絶やす

明けき 理とて 持たず、

さらば、さらば、君去れ、

我ぞ 獨 泣かまし、

泣き 泣きて 涙の

盡くる日ぞ、或は、

ろこに 寄りて 安らけくぞ

眠るべき 岩も ありなむ。

こゝ 暗し、來し方 暗し、

行方も 同じ 暗がり、

さあれ、ろは 眼の 誤りか、

非ずか、薄き光の、

あるが如、無きが如、

時折を、遙か 高きに、

遠くぞ みゆる 嬉しさ。

かの光 燃る 丘に

得も着かぞ 途の半ば、
斃るゝも 可し、うは、
運命なり、奈何せんや、
唯、我が墓を、願ふは、
輝きの丘への
途の上へ 在らしめよ、
うここに、我眠らん、
うここに、我瞑して、
後の代、若き子等が、
此途 這る 折の
道しるべ たらましどころ。

あこがれて

あこがれて、雲と化り、
天の氣に溶かれて、
五月の雨と しょぼく、
千萬の花に ぐだけて、
日に 映ゆる 玉とならまし。

あこがれて、風と化り、
うよくくと、蔭ふかき
木の間を、流に沿ひて、

水草の 細葉に 堰かれ、
白花の 小きに 消まし。

あこがれて、 鷺と 化り、

秋の日 くらく 寂びたる

湖畔 頽れし 城の

古壁の 苔の上 よぢて、

幽眠の 夢を 追はまし。

あこがれて、 雪と化り、

空に つつく 枯れ野を

寒風に 捲かれくく、

朽井戸の 暗き底に
音も無う 溶けて消えまし。

こまに

小^こき 我^わ友^{ゆう} 雅^{みやび}び姿^{すがた}の
白^{しろ}木^き滑^{なめ}らかに、 馨^{かほ}の香^か かをる
キオリンの 美^{うつく}しこま。
氣^きの如^{ごと}き 四^よ條^{じょう}の
かぼろ絃^{いと} たとはい、
乙^{おとめ}女の 額^{かぶ}を 流^{なが}るゝ
ほづれ毛^けの 疎^まらなる
冠^{かんむり}りて、 臙^{べい}脂^じの 黄^{わう}に 匂^{にお}ふ
ふくやかかの 盤^{ばん}の 上^{うへ}に。

沈^{しん}黙^{もく}よ、 汝^{なほ}に 思^{おも}わりげ、
漂^{たふ}ふ 絃^{いと}の 殘^{のこ}り音^ね 吸^すひて、
來^きし方^{かた}、 三^{さん}とせ、 末^{すえ}はるかに、
れどろかや、 幽^おなる 夢^{ゆめ}を濃^こく。

愛

愛の きざみし 胸なる 影
愛の 授けし 胸の あたゝみ。

うの 影は 花より 妙に
うの 熱は 火より 烈し。

うの 影は 胸の 大帝
うの 熱は 胸の うまし香。

うの 影は 永久に 消えず
うの 熱は とはに 冷えず。

沈黙

人は 得知らぬ 惱みの
ひねもす 胸を こめては、
組む手、悶むに 堪はずて、
慰藉と 緋く 聖經

畏さに、れのづと 縮まる唇
沈黙に 開く 心の 眼に
かすけく 映つる 尊き影。

岩は 動かぬ 信頼
しる金の 塞ぞ 胸に 築ける

籠もれば 深き 城の 寮や
佳香に 煙り、金翅が 舞ふ、
夢か、非ず、あこがれか、否。
昇り 澄みたる 氣根の
高うして、われと拜がむ 我が心かな。

花 賣

朝な 朝な、
東空の 紅雲 分けて、
光 音なく 野を 渡る時、
山桃の 簇葉 冠りて、
蠅蠅 咲く 小川に 添へる
葦小屋の 小さきより、
紅燈 透く 大理石の
やわらかく、 あたゝかき
ろれかとも 思はるゝ

美し 娘が、 なよやかに、
百花の 色香を 盛りし
籠さげて、 城の塔
はの見ゆる 森かげの
市さして、 賣らんとぞ 行く。

夕な 夕な、
薄紫の 靄に 卷かれて、
示導の 星 仰ぎつゝ、
夕禱の 鐘に 送られつゝ、
少女、 黙念の相 氣高く、
感謝の 涙 見ゆる 歸途

辻の 土橋に 地藏を 禮し、
一本 立てる 柏 めぐりて、
麥畑の 真中を 透る
芝徑を 静かに 辿り、
古樫の 林の 奥の
れろろしき 獄屋 見舞ひて、
堅く 冷き 鐵格子より――
籠に 残りし 花を 皆がら、
束ねて 笑みて、 ねもころに――
古い さらばいし 囚人へ
慰藉と 惠むを 常とせりき。

若うして、 戀の 遺恨に、
人を屠りし 罪 問はれて、
三十年あまり、 暗黒と
寂寞に 胸の 憤炎は
埋み火の 燃ゆる 立たぬ、
執拗くも 熱せしが、
黄 桃 紫色 光薄く
獄屋の 鐵網 撫づる夕べ、
氷雨 鼠黒の 針刺す暮、
たうがる、 頃どし 云へば、
ろくに 聞く やさしの 足音、
神々しかる 姿 よせて、

遣る 花束の 數積れば、
罪人、花の色に、香に、
少女の 情の やさしきに、
慚愧と 悔悟の 月は
怨恨の 叢雲 分けて、
夜な夜な、光浮ひまさり、
眞如遍照 本然の 性に 歸りぬ。

夕されば、老いし 罪人、
寂寞 闇黒、寒濕の
領する 獄屋の 窓に 倚りて、
夕靄に とぼとぼと

昏れて 行く 淋しき 森の
下路を 遠くも 見やり、
わが 若き 天使は」と
待ちあぐむ 心根ぞ
いちらしく、いたましく。

霧白う 流れて、
無き程の 風 おりく
枯れ枝を 渡る 夕ぐれ、
囚人、窓框に 絶りて、
残んの 夕光 退いて 行く、
朽ち葉 布く 下徑 遠く、

眼を走せて、少女はと、
夜の幕厚く落ちて、
我が足の見ゆるなるまへ
待ち待てど、何故か、
花賣娘は終に來で、
初夜を撞く鐘の音は
時雨にぞなりにける。

鶉鳴く朝あけ、
秋たけし薄日
はかなげに、獄屋へ
這ひ入りしるの時、

老翁の枯れし形骸は
骨既に冷たく、

秋の長夜悶えて、
萎みにし百花の
あたらしき、ふるさ東
堆きなかにうもれて
美しき死をぞ遂げける。

秋

(一)

葉は 落ちぬ、
ひとひら、
又 ひとひら、
いかなる 深き 胸の
奥よりや、この 音――
秋風、
うす黒き うめきや。

(二)

虫の 音よ、
かすかに、
ほそく、
又 かほそく、
しらぶるは
何の 悲調^ひを、
その聲に、うの譜に
ふさふべき 詩やある。

(三)

更し 夜の 寂寞を

ゆるがせて、遙に、

江を 越えて、かなたの

林より 流るゝ さや音――

笛の音よ、

絶えつ、つゞきつ、

あがりて 細く

沈みて 太く

聞くとなき 心を誘ふ

堪む難き 愁の調
切なりや、切なりや、
いつしかも 湧きし 涙の
はらくくと 古書の上

(四)

霏々と 小雨の、

枯野 十里を

蕭々と

煙る あした、

朽杭に

尾羽 擦り 切れて
縮める 鳥の
眼を 閉ぢて、
首 かたむけて、
地の 極み
つめたき 音の
かすけき 呻き
聞くに 堪はずや、
ろの 瘡せし
胸の 毛を
ゆるがせて、
時しなう

鳴く 聲の さびしら
ひゞきてや
はろくくと
今 菊散りぬ
北の窓。

(五)

闇を 登る 峠の
徑 盡ぐる 頂を
相挟む 深木立
星一つ 青く 流れて

右を出で 左に入りぬ。

仰げば 圓き 星空

擧ぐる 手に 觸るゝ ねもひ、

夜を 寒き 秋風に

絃なして さまよふ 雲を

奏でなば、聞ぬ

聞えぬ 微妙の

幽愁の 調や いかにも。

苦蒸せる 庚申塚の

古碑に 片脰 よせて

翼得し わこがれ

西に 又 北に

はてし 無う 高く

涯なき 涯を

漂ふ 我の

魂よりや、非ずや、

うつゝなき 眼掠めて、

又、星の光 流れぬ。

古 壺

鶏にまひの こゝと 鳴く 音に

ふと 醒さめし 秋の里

暮 ちかき 日あか丹う

流れ行く 百さる日ず紅りの

幹みきに 背推して

抱けるは 白堊びやくの

鑄まが 青き 古壺

奇く花はな 鬼おにの 夢ゆめの如ごとく

糸金いと 緒おく 寂さびびたる

蓋けしとれば、灰白はいに

乾ひ枯がれたる 頭づ蓋がい骨こつ

欠ひけ 落ちし 疎まらの

黄わなる 齒はを ゆるがせて

ひゝと 其そのの 笑わらひ聲こゑ

嘲あざみげの 音ね 寂さびびて

『死しの領りやう こゝに、情じやうの火ひ

とほに 消おえ、血ちの香かほ

肉にくの あたゝみ、皮かわの色いろ

みながら 失うせて、唯ただ

空そらと 枯かと 冷ひやと

相含む 不盡切

こゝに 變らぬ 生命

「時」と からみてか 行く。

こゝに 記憶なく、

こゝに 豫計なく、

こゝに 運命なし、

さわれ、

思はぬ 思

見えぬ 色

にははぬ 香

響かぬ 音

あらゆる ものゝ 数々、

すべては一、一は總

これを 真と云ひ、

これを 法となす、

こゝに 美なく、

こゝに 善なし。』

おもかげ

見かへれば、おぼろく
はるぶくと 昏き 來し方

「今」を流す 「時」の潮

千種の 彩に 織られて

うねくと 唐錦

端なき 帯に 似たりや。

雑色 むら濃 くすめる 地に

金絲 銀絲の きらめきか

まだらに 浮ぶ 人の おもわ
美し人の 優類 さやかに。

悠悠 淀まず 「時」は 行けど

戀しき 面わの 濃うか 薄く

映らぬ 波ころ 絶えて なけれ。

いさり火

索漠、たとへば、夕の海の
暗澹、闇に、消え入る如く
模糊蒼茫の「生」の潮に
見よや「愛」てふ燃ゆる漁火
からむよ「情」の玉藻、花草。
「生」の苦海の闇く、寒きに
光と熱を與ふるは「愛」
「生」の苦海の寂れ、荒びに
薰りと色を與ふるは「情」。

君こそは

いくろたび、あゝ、いくそたび、
ねれんじの光の奥に
はるくと百花匂ふ
「生」の道映しては、
光榮、幸福、安樂の
將來に、酔ひしれしめし
君こそは、あなかしこ、
靈術の美き法者。

いくそたび、あゝ、いくろたび、
地は 足の 下より 裂けて、
硫黄火の 焰 ゆらく
青紫に 燃ゆる 尖毎
水蛇の 八岐頸
血の 色の 鎌並めて、
生と「死」の 國わかつ
煩悶 憂患 苦惱に
龍巻かせ、渦巻かしめし
君ころは、ねそろしや、
靈術の 美き 法者。

人へやる扇に

心臓、情思に 裂けなば、
小扇の 形にや 咲くべき、
句の、むらさき、淡紅、さふらん、
眞白、深紅や、色をな 問ひう、
うは 時折の
韻にころや 薫れ。

眞夏 朝あけ、水の岸の
花に 玉置く 露を 掬ひて、

小扇 揺れよ、君、其御襟に
願ふは、天の氣 薫り 淡く、
雪布く 素絹の
御胸へぞ 泌めよところ。

幻想

白雲 ゆらぐ 靈音 聞きて、
落の 圓葉の 蔭に めざめ、
夏の 日 きらゝと 白う 射返す
柿の 簇葉の 枝間を 抜けて
躍れば 蒼穹、いつしか 君と
抱いて 相飛ぶ 萬里の かなた。

煌耀 五彩の 虹 まばゆく、
天路 半ばに 我れは 眼しひて

絶れば 戀人 膚 冷たうて
毒蛇の 錢鱗 連る 如し、
「怪しや」と 疑念うたがひさす 其利那そのりな
血の波 燃もえ立つ 淵に 落ちぬ。

「あな、我れ死しぬ」と 合掌静坐、
専念、樂土を 額ぬかに 描えけば、
秋風 をちこち、野に 月光つき 満ちて
恍惚、行くとしもなう 辿り、
歩毎あゆみごとに 瘖あやずると 胸を 探れば、
身は 枯葦一管 水に 添そひぬ。

黄金小筥

青實あおみ葡萄の 房 幾つら、
兩の 肩より 膝に 受けて
袖垣に 倚る 水の ほとり。

うつけ心地の 背に ものありて、
黒髪 まじはる 雪の 臂延べ、
やさしき 掌てのひらに、黄金造の、
紫濃藍むらさきあざいの 總ももを 結むすへる
小筥こばこを からゝと 揺り薫らせて、

君、こを懐かば、齡は盡きじ

倏忽、四邊は淡紅の靄こめ、

脚邊に、纖月、翠銀煙り、

白鴻、我をば載せて飛ぶに、

如意の花片、雨の如く。

驕樂、狂じて、紐の紫

ほどけば、靈香、薰する所、

身は散り碎けて、無数の星火

深紅の、きらめき、天を蔽ひぬ。

金鼓

橄欖色の綾羅

佳香、薄き

袂、三尺、

眞白手に

金鼓、捧げて

立てりな、妖女

嬌乎とばかり。

「打て」とや、響の韻によつて

汝が性判せん」とや、うは奇なり、
好し、いざ、真向に正しうかざせ
「あおとひと聲、反指、うろへ、
打てば、何ごと、金鼓は無うて、
妖女が軟手の掌ふかく
入るよと、思へば、五つの指に、
うと、熱かう握られてあり。

「れ、汝れ、無禮者、鼓は打たで、
奇怪、何物とぞ、我手を打つや、
やよ、又打ち見よ、此度ころは
外さず、最央を見事に打てや、

妖女、嘲笑の色も艶に、
緋總の薫香を振り、漂はせ、
兩手に抱いて胸の前に、
金鼓の容量は前に倍し。

「こたみぞ外さじ、あれ」とばかり、
掌かへして強く打てば、
又こは、何事、鼓は無うて、
我手は、妖女の乳を探り、
双の腕に背を捲かれて、
軽き懐抱の中にして在り。

妖女^{くわしめ} さりゝと 柳眉を 瘡^{かさ}はせ、
咄^{さつ} たわれ男や、さは、何なれば、
この 猥行^{みだら}をば 敢て爲すや
我体^{わがみ}を 突き退け、せゝら笑ひて、
「いざ、打ち直せ」と 金髪揺つて、
こたみは 優頬^{やさほ}の ほとりに翳^{かげ}し、
金鼓は 又もや 容量^{かさ}を 増したり。

思はぬ 罪に 半ばは 狂ひ、
胸中^{むねちゆう} しどろに 振ふ 手あげて、
金鼓の たゝなか 碯^{はた}と 打てば、
何ごと、我手は 頸^{うなじ}を捲きて、

薰^{かほ}する 紅唇^{こうしん} ひしと 吸ふに、
妖女^{まじな}は 見るく 毒蛇^{どくちゆう}と 化^なりて、
冷き青鱗^{せいりん} 逆透^{いせう} 三丈餘、
十捲、二十捲、我れを 緊^しめて。

閉ぢよ、早く

忘れまほしき時に
消ぬ失せむ 影ならば、
ものに 満つべき 胸に
宿すべき 隙なからめや。

あゝ、否、待てよ、しばし、
そは 恐ろしき 客人――
胸の 血を吸ふ 美しき 魔が、
閉ぢよ、早く、胸の戸を、門守

門守よ、汝が 名は「愛」、
おとづるゝ 影 警むと
門守るに、汝れは餘りに弱きかな。

愛の門より

もの 忘れ易き 人間の
とこしへに 忘れ得ぬ
影が 深く 胸に 宿る。

智の門をくわいて
入るものは、久しからず、
いつしかに、れのづから 消ゆ。
とこしへに 胸に 潜みて
人間ともに 墓さへ 被ぐ
ろの 影は 愛の 門より。

鏡ヶ浦雑詠

(一)

忘るべき 思ならば、
この波の 千尋の 底へ、
手すさびに 拾ひ上げたる
磯濱の 此の石と 共に捨てなむ。

忘るべき 思か、否か、
惑ひつゝ わづらひつゝ、

腰掛けし 岩に 日暮れて
わが足は 見ぬす なりたり。

見渡せば 沖は 漁火
星の如 群れて 光るを、
あゝ、わが胸は 夜の波、
黒く 揺るゝ音 絶ゆる間も無し。

(二)

砂濱に 書ける 此の字の、
白波に 洗はれ 去らば、

捨つるべき 此の 思ぞと、
はかな 占頼みて 見れば、
白波は 半ば 洗ひて
文字の 半ばは 残りたり。

さらば、こは、半ば 忘れて
半ば 抱かむ 思なりや、
惑ひてぞ 此の夕も 亦
磯づたひ さまよひ 行きつ
見かへれば 人なき 濱の
砂の上に 遠く 長く
わが 足あとぞ 亂れたる。

(三)

西ひがし 行きちがひたる
砂濱の この足跡に
かの君が 残したる
足跡も 交らひたらむ。

波近く 細う優しき
足跡は 君が其れか
たゝずみて こゝにしも
海的美や めでたりし
半月の 形かたなせる。

波の穂も 心ありて
うつくしき 此の足跡を
惜めるや 洗ひも去らで
さやかにぞ そのまゝに 残したるよ。

(四)

夕日かけ、八千色やちいろを、
波遠く、いろどるに
あこがれて 磯濱行けば、
岩の上いに、かちと音ねたて、

傷ましや、我が足に、
砕かれぬ ちさき貝。

砕けたる むらさきの
いくひらを 拾ひ上げ
たなごこに 皆 載せて
思はずも ひとしづく
落したり 此の涙。

あゝ、あはれなる 貝がら
砕かれて ちり／＼に
暴虐き 罪人の

手の上に 集せられつ、
恨み泣く 聲もせず、
みじろかず、つめたうて。

手を 揺れば 夕闇に
かち／＼と 微かなる音
あゝ、いたまし、あゝ、すべなし、
砕かれし 汝が身を見れば、
腸が ちぎるゝ 思ひ。

あゝ、潮よ、いかなれば、
此の ちさき 貝がらを

かきのせて 運び上げしや、
汝れなくば、この夕べ、
この 悲みの なからましを、
さらば、汝れ、いたましき 幸さいななの貝よ。

汝なが 敵あだの 手より のがれて、
水底みづそこの 静しずけき 家に、
やすらかに 永久とこほに 眠ねれ。

悲みに なえし 足あげ
おもむろに 渚なぎさにわりて、
ひく潮に のせやれば、

日は暮れて、うしろの山の
鐘かね樓ろうより いとも哀れに
鐘の音の 添そひて行きけり。

(五)

海底かいぞこの 忍しのび得ぬ 思おもや
高たかじて予 噴はなせ 昇あり
水の面おもてを 破やぶり 出いで、は
うれはしき 色いろを 盛もりしか
夕雨ゆふぐの 海うみづら 遠とほく
眺ながむれば 島しまかげ 二ふたつ

もだえげの　さまよ　いたまし。

どこしへの　沈黙は　包む

どこしへの　つきぬ　わづらひ

舟にして　めぐりて　見れば

草も木も　なべて　憂ひぬ。

あゝ　汝は　大海洋の

わづらひの　凝りにし姿

われもまた　悶えの　化身

島がねよ、ゆるせ、もゝとせ

松が枝に　小舟　つなぎて

こゝにしも　愁ひの　詩を
つゞりてぞ　死なましところ。

(六)

月の海　靄淡う、

波　和ぎて　空を　浴ぎ、

沖　遠く　續く　漁火

金色に　ちさう　燃ゆ。

岩は　打つ　波の音　重う

夜を　領する　沈黙叩き、

水天、色を一に
渺として 相和せり。

銀光は 空の星
金光は 海の星
燦たりや 爛たりや
相映じ 相飾る。

空も海、海も空、
いづこまで 海なりや
いづこより 空なりや
渺として 極みなし。

岸打ちて 返る 潮に、
乗りて 今 想像は 馳せぬ
いや遠く、島が根 越えて
迷ひ入る 漂渺の中。

飛び行けど、流れ行けど
果しなき 宙 はろく
想像の 翼 疲れはて、
いづらへか、又 歸り來ず。

(七)

立巖に 背 もたせて、

薄草履 砂に 埋めつ、

人も無き 磯濱の

眞晝をば 我れ獨り

あてがれつ 呆けて立てり。

ひとしきり 打ち寄せて

足洗ふ 白波に

ひかれ 来て かるやけく

わが 脛に 纏ひたる――

と見れば――緑さやか

若藻草 莖細う。

手に執れば、なよやかに

撓みたる いたいけさ、

さからひそ、なびけよと

やさしうも ゆらくと

造られし 汝れなりや。

あゝ好し 美し 玉藻よ、

地にしては 若柳

しだり枝の なよくと

温風に 軽く舞ふ

やさ姿 うれは 汝が姉。

ゆかしかる 姉妹や、

優の、美の 表章とす

祝福はれて、地に、水に

観る人よ かゝれとす

平和の姿 装ふや。

優しきに をたけびて

悔ひ耻ぢぬ 者ありや、

あゝ「優」や「美」や「仙脱」や

ろは 敗れざる 陣にこそ――

争はざるに 勝つ者やある。

紅文字

指 五つ 開けば、

手の掌に、こは奇し、

細文字の なよ／＼と

書かれたり、紅もて。

こは、全く 知らぬ 筆ぶり、

得解かぬ 意味の 由がわりげ、

唯見る 四の 優假名、

詞ども 思はへず。

小琴 枕に、いつしか、
まどろみし間を、こは誰が
戯書か、山蔭の
一つ家の 椽にして。

惑へば 荒し 草庭、
うことなう、得ならぬ薫香、
あこがれて、何時しか、
葉を吸ひつ 立てる 木の蔭。

のうせんかつら、はびこり、
蔽ひし下の 眞清水

覗けば、美し、我が影
白百合の 楚々として、

疑は、謎は 解けたり、
手の文字の 意味は 解けたり、
辱な、我も亦
れもはれの 幸人か

と見れば、淡紅の花片
野に山に、見渡す限り、
空填めて、上に下に、
散り まよふ 盛観や。

四邊鎖す 薰香に
甘く痛む 心臓よ、
躍る血に 五體は 痲痺れ、
骨溶くる 現無さ。

聲有り、何處よりか、
耳に入りし かしこ音、
暖かき うつけ心地
消え失せて れのゝく
手の掌に 文字とては無し。

も だ え

「愁ある胸を、さらば、
眼を閉ちて、人の長き
双の腕に 任せんか。
日は 低き 草原、
ひとつ木の 杉の影
落ちて黒く、江のほとり、
風に 揺るゝ 見つめつ、
散れ残る 社の跡の
礎に 腰を ねろして、

夢のごと、我は思ひぬ。

ゆかしき面わ、深く、
底に薰る胸を、さらば、
眼を閉ぢて、人の軟き
白き腕に、任せんか。
眞晝、日きらり、
陽炎、かをり
緋牡丹、惱む
階の上、
檜扉に、肩倚せて、
うつらく、我は思ひぬ。

得こゝ見ぬ、高き
いづこにか、在るべき
ものを、追ひ求めて
休まぬ、翼
はらたく胸を、さらば
眼を閉ぢて、人の血の
熱き腕に、任せんか。
夜半、高殿の
銀の、欄干ゆ、
振る丈の、素絹の袖に
星坐を、揺つて、

驚く 火光の
動亂の 裡に、
狂はしう、我は思ひぬ。

古井戸

森古りし 丘の 裾を、
水黒き 流に 添ひて、
霧薄き 夕を 獨り、
うら若き 尼の 行く。
墨染の 袖に 寂びし
身は、肩は、勤業の
朝夕に 細りたれ、
しかすがに 染め残る、

微かにも、頬の血や。

落葉吹く 秋風に

送られて たゞくど、

枯れ櫓の 斜丘を 過り

鳶丹き 藪蔭に

翻る袖 見を隠れ。

茶の木並、繁く、疎らに、

相はさむ 小徑の 半ば、

とゞまりし 尼が 眼は

酔へるごと、側なる

柚子の實の 黄なるに落ちぬ、

あゝ、こゝろ、小菊散らしの

紫の 振袖の

小春の 一日、

繪日傘を 傾けて、

行き摺の 若人を

見初てし 初戀の跡。

一叢 薄 尾花 老て、

行く風も 心置きげの

徑折れて、松の葉 根く

散り布ける 芝生の

方丈が程 黄ばめるに

尼が 頬は 忽ち

紅を かつ潮し、

昔 薦たき 色香の

匂ひ出し こゝころ

月薄き 夜な夜な

かの君と 契りてし 小野。

女郎花 折れたる

枯れ藪に 杜絶わくの

石あらしき 道の果

八重葎 半ば 蔽ひし

古井戸に 夜は落ちて、

ろよ渡る 風におのゝく

尼が 唇 色なう、

わなゝく 諸手を 胸に、

もの怖の 眼を 閉ぢぬ、

あゝ、此處が、星飛し

眞夏の 一夜

小雨に 更し頃を、

世は罪と 誣ひ責むる

みろか子を、狂じてや、

搔き悶ふ 手より 投し井。

わろろしき昔 歴々
額繞る 焰とる
痛恨 恐怖 手にく
良心の 利鎌揮ひて
記憶を 八千裂の
苦痛に 疲れ果て
力なき 瘡し身を
古杉の 幹に 倚せてし
尼が眼の 明きしともなう
落ち行きし 井の底の
朽水に、いつしか出し
月影の暗く 細きに、

何の魔が 尼は 誘かれて
一足 三足 よろめく
間もあれや 井の椽の
土は崩れて 永劫
光とっかぬ 真底に
人知らぬ 骨と朽ちけり。

春の日

(一)

春雨の 黄昏や、
蛇の目傘 細めに 閉ぢて、
散りかゝる 花の堤を
なよ姿 すらりと 細う、
水色の 振の袖
ろよ風に 靡きたり。

疎らに 注ぐ 春雨
優しうも 心ありてや、
蛇の傘 深ませて
傘の内 しのばしむ。

(二)

一つづゝ はらくと
落ちて来る 軒の雫を
悲しうて 我が泣く 折の
涙にぞ たくらべつ、
窓に依り、 うとくと

春雨の 小半日は
淋しうも 暮てけり。

(三)

人と樂しむ 人なれば
恨も人に 深き人、
あゝ君も人、我も人、
君、我 笑み、我を忌み、
我、君と笑み、君を忌む、
花あればこそ、春の日は
恨み恨まれ、笑み笑まれ、
けふも 夕べと なりにけり。

靈 鐘

天上の花や 碎けし、
ふと 胸に 響きたる
うの音する 鐘鑄んと、
技工に凝り、念じ惱みて、
うら若き 鐘匠
痛ましう 頬れちぬ。

紫の 焔を 捲いて、
深紅 燃え立つ 熔鑛に、

幾^よう夜半、精^こや籠^こめけむ、
満願^{まんげん}の、静^{しず}き^{まだ}早晨^{さき}
冷^{ひや}え成^なりし、鐘^{かね}の、い^いみじさ、
あなかしこ、望^{のぞ}満^みてたり。

雨^{あめ}細^こき、里^{さと}居^いの、獨^{ひとり}、
倦^うては、撞^つ木^き把^とる夕^{ゆふ}、
妙^たの音^ねの、心^{こゝろ}に泌^{しみ}みて、
我^{われ}ながら、う^うら恐^{おそ}ろしう、
青^{あお}星^{せい}の、覗^{のぞ}く、破^や壁^{かべ}、
薄^{うす}闇^{やみ}の、も^もの凄^せきかな。

迷^{まよ}ひ行^いく、奇^き魂^{たま}や、ふと、
感^{かん}じても、潜^{ひそ}みしものか、
見^みるからに、齋^{いひ}し此^{こゝろ}鐘^{かね}、
岩^{いわ}白^{しろ}き、後^{うしろ}の崖^{がき}に
月^{つき}落^おつる、宮^{みや}の朝^ああけ、
金^{こん}色^{しき}の、梁^{はり}に、吊^たられぬ。

若^わ草^{くさ}の香^かを、か^からみ立^たつ
陽^{ひかり}炎^{えん}の、攀^かづる、夏^{なつ}の日^ひ
霧^{きり}黒^{くろ}う、波^{なみ}打^うつ夕^{ゆふ}べ、
森^{もり}越^こえて、丘^{かみ}を滑^{すべ}りて、
奇^くしき音^ねを、漲^{みな}ぎらすに、

靈鐘は 日每名を得ぬ。

幾度か 星は 移りて、
騷ぞき初めし 世の果、
旗鼓おどろ 颯を 捲きて、
雲拂ふ 紅焰の底、
兇蠻 鐘を 掠めて、
一村 遠く 唯 灰。

時を食む 黒潮荒く、
鐘匠 揺られくして、
つくも髪 霜たけば、

今生の 名残を せめて、
我鐘に 一目 惜まむ。
憐れなる 老の願や。

くづ折れし 秋の末花
夕風に さいなまれつも、
薄き日の 光 慕ひて、
瘠し地を這ひ 悩む如
うらぶれて、 老いさらばひて、
わが鐘を 尋ねつゝ、
迷ひ行く 山の北、 川の西。



不評
復

明治三十九年二月九日印刷
明治三十九年二月十二日發行

著者

東京府豊多摩郡下戸塚六百二十六番地
細越省

發行者

東京市本郷區千駄木林町百九十六番地
日高藤兵衛

印刷者

東京市神田區美土代町四丁目五番地
江澤三

印刷所

東京市神田區末廣町三十五番地
江澤印刷所

發行所

東京市本郷區
千駄木林町百九十六番地

日高有倫堂

定價金參拾錢

郵稅金四錢

靈
笛終

行く春の花 散る夕江、
靄の遠、薄るゝ音追ひ、
漕ぎまよふ 枯れし腕に
力つき 流るゝ 小舟
緩く速く、波のまに〜、
いづこよりか、又も微かに
懐かしや、わが鑄てし
鐘の音は 絶えつ、續きつ。

大 賣 捌

東京市京橋區尾張町
 東京神田區表神保町
 東京神田區裏神保町
 東京日本橋區筋屋町
 東京日本橋區傳馬町
 東京日本橋區通三丁目
 東京神田區表神保町
 東京日本橋區吳服町
 大阪心齋橋南久太郎町
 大阪南本町座摩ノ前
 大阪備後町四丁目
 京都三條寺町
 京都二條寺町
 神戸北長狹通
 甲府市柳町壹丁目
 水戸泉町
 野州足利町一丁目
 廣島市
 岡山市岡山町
 周防國岩國町
 山口大市町
 高知市種崎町
 熊本市新町二丁目
 熊本市
 鹿児島市松山通一丁目

警 醒 社
 東 京 堂
 上 田 屋
 前 川 店
 目 黑 書 郎
 林 平 次 郎
 修 隆 學 堂
 北 隆 學 館
 福 音 社
 杉 本 書 店
 吉 岡 平 助
 聖 書 房
 若 林 書 店
 福 音 舍
 大 塚 柳 正 堂
 川 又 銀 藏
 青 木 書 店
 積 善 館
 奧 田 金 昌 堂
 白 銀 日 新 堂
 同 支 店
 澤 本 書 店
 長 崎 次 郎
 好 文 堂
 久 永 金 光 堂

筑後久留米市
 靜岡市
 橫濱市
 同
 同
 同
 盛岡市肴町
 前橋市曲輪町
 越後國水原
 新潟古町
 越後長岡
 金澤市片町
 高岡市守山町
 福井市佐桂枝中町
 信州長野市大門町
 信州松本木市
 信州諏訪町
 仙臺市新傳馬町
 仙臺市東二番町
 仙臺市大町五丁目
 陸中一ノ關町
 陸奥弘前市土手町
 青森市米町
 秋田市茶町
 北海道札幌區南一條西二丁目

菊 竹 書 店
 吉 見 書 店
 第 一 有 隣 堂
 弘 集 堂
 勉 強 堂
 弘 文 堂
 佐 々 木 仙 助
 煥 乎 堂
 西 村 六 平
 西 村 支 店
 西 張 次 平
 宇 都 宮 書 店
 學 海 堂
 品 川 書 店
 西 澤 喜 太 郎
 松 進 堂
 日 進 堂
 紀 港 堂
 鈴 木 書 店
 藤 崎 書 店
 佐 藤 喜 年 店
 今 泉 道 太 郎
 同 支 店
 成 見 清 兵 衛
 富 貴 堂

明治三十九年二月十日印刷
 新刊發行の都度増補訂正す

有 倫 堂 出 版 書 目

東京市本郷區千駄木、林町百九十六番地

日 高 有 倫 堂

川上眉山著 ○ 鍋木清方書

近刊小説 觀音の石

(上製美本)

定價 金七拾五錢

郵税 金拾五錢

同情豊富 文致清艶

思想高逸 装釘美麗

これ本書の特色也

(近刊豫告)

ルナン 耶蘇傳

(上製美本)

定價 金一圓五十錢

郵税 金十五錢

耶蘇は人類の王也。ルナン其傳を結びて曰く「其教は永へに新なるべく其物語は氣高き眼に涙を溢れしめ其苦みは傳しき心を動すべし、世々の後まで人類の中曾て耶蘇より偉いなる者生れずと語り傳へなむ」と。此書教主の生涯、其懐しき神の國の思想、天父の觀念を叙べ、奇跡を論じ、他の宗教との關係を明にし、其國家觀、社會主義觀また此間に隠見す。自由討究の精神一貫して批評の鋭刃觸れざる所なく、之がため一時歐米基督世界を震動して顔色を失はしめたりと雖、世界史上に於ける耶蘇の位置は寧ろ之によりて確められたりと言ふべきなり。梁川先生は絢爛瑰麗、現代獨歩の筆を以て此書を醗して世に問はる。世界の認めて耶蘇傳の白眉となすものと摸範的美文とは之によりて吾邦文壇に供へられむとする也。

泉鏡花著 鍋木清方書

再版小説 誓之卷

(上製總クロース美本)

定價 七十五錢

郵税 金十錢

これ鏡花先生があふる、ばかりの同情を以て、天と地と人に訴へて同情を求めたる、初戀の詩篇也

饗庭篁村著 鍋木清方書

新刊小説 不問語

(上製總クロース美本)

定價 七十五錢

郵税 金十錢

竹裏の蟾蜍地仙と化して氣を吐くと虹の如く、飯中の彌二郎賣鐵砲を發して僅に雀を驚かす、しかれども其光り天に沖り、其響き地を動かす、これ著者の手袋にあらずして其の不問語なり

饗庭篁村著

近刊小説 山懷

(上製總クロース美本)

定價 七十五錢

郵税 金十錢

山水淺深、人情厚薄、溫泉氣蒸して土地暖かく、貧富心をかへす情義うるはし、花あり、實あり、涙あり血あり、一讀その情趣を掬すべし

饗庭篁村著

近刊小説 虛空塵

(上製總クロース美本)

定價 七十錢

郵税 金十錢

塵積つて山となれば山は碎けて一陣の風に吹飛ぶべし、飛びてまた積りて山となる其の戀の山欲の山、山又山に踏み迷ふ者のよき道しるべは是れなるべし

大町桂月著

再版 我が文章

定價四拾八錢 郵税金六錢

桂月先生の文章愈老熟して縦横自在真情流露し行く處に行き止る處に止まり些の術も所なく苦む所なく直ちに人を以て文を遣り洒落飄逸快闊にして男性的意氣を發揮し而かも言外に情熱溢る文此に至れば聖なり先生の文の如きは實に當代の逸品なり

文學士 久保天隨著

新紀行 山水寫生

定價四拾五錢 郵税金六錢

天隨氏の紀行文は、世すでに定評あり。泰華を眼前に仰ぎ、溟渤を脚底に湧かしむるもの、これ其文の特色にして、決して他人の模倣を容れざるものとす。本書收むるところは、長短無慮二十餘篇、その地を以てすれば、南鬼界の天に臨み、北蝦夷の境を踏み、實に著者帳中の秘たるものなり。造化の工を讚賞し、天地の美を景仰するもの、机上この書なかるべからず。

文學士 大町桂月先生選評 日高有倫堂編輯部編纂

近刊 明治大家文集

定價金七十錢 郵税金拾錢

明治の昭代文運の勃興前古其比を見ず文星森列著作の多きと汗牛充棟も當ならず今一々諸大家の著作を讀み其風格を知るは容易のとにあらざるこの書正確なる批評眼を以て明治三十八年の間論文といはず美文といはず小説といはず苟も文章を以て一家をなす特色を有せる文豪數十名を選びまた其名文豪の特色を發揮せる名篇を選び添ふるに桂月先生の詳細なる批評を以てす明治文章家中の眞の文章家は集つて此の書にあり眞に之れ明治文學の縮圖にして一讀の下以て明治の諸大家の面影を伺ふべく文壇の一大偉觀たるを失はず文を學ぶ人においては眞の模範とするに足る有益にして且つ興味ある良書也

德田秋聲著

新刊 小花たば

定價四拾五錢 郵税金六錢

此に美しく束ねられたる花の数は何々ぞ。紅白紫黄必しも剪綵の妙を悉さざれども、清き自然の野趣は此の一束に盡きたり。全篇長短合せて十三章、總て作者獨擅の詩材に於て、亦獨得の文字なり。秋聲子が眞技倆を抱負を窺はむには、此篇を措て他に求むべからず。切に江湖の眞摯なる讀者の高覽を希望す。 文學士 小原無絃譯

新刊 原文シェレーの詩

定價參拾五錢 郵税金四錢

シェレーは一個の豫言者なり抒情詩人の醇なる者なり其詩を作爲するや神興の白熱を以てす光焰萬丈生氣辭句に溢る眞個天馬空を奔るが如し無絃子其詩を心讀する多年今や彩筆を揮つて遺憾なく我詩型に譯す原詩の眞髓を傳へて遺憾なく朗々として眞に高誦するに足る乞ふ詩神の寵兒たる者一巻を抱いて詩腸を肥せ。

秋元蘆風譯

新刊 獨野葡萄

定價參拾五錢 郵税金六錢

○原文對照(卷末に評註を附す) 傑作中、主として、叙情的逸品を採つて、之を邦韻に翻したるもの、原詩の對照と、卷末の評註とは、又以て、獨逸詩人の面影を窺ふと同時に、庭園の花に酔るもの、來んか、請ふ、庭園の花に酔るものは、來つて、野邊の果實を味へ。 文學士 小原無絃譯

新刊 原文バインズの詩

定價參拾錢 郵税金四錢

文學に平等主義を持して革命思想を鼓吹せし者は實にバインズを以て古今東西隨一と爲す其詩や古法舊格を脱して天真朴直なる精神を現じ最も創新を以て勝る今や無絃子の靈管に依り譯成り多感多情にして功名心燃ゆる如き若き田園詩人の面目髮髯として其一卷に溢る満天下の才子佳人幸に愛讀の榮を吝しむ勿れ

大町桂月著

近刊 代表日本人

定價四拾五錢 郵税金六錢

日本人を化せしは區々たる教義にあらざし
て事實也歴史也國體也祖先の發揮せる國民
性也我が國には儒教佛敎以外一種の武士道
ありて今日の發展を致したる事今更言を待
たざる所なるが武士道の真相を知らむとせ
ば理論のみならずは不十分也之を人物事實に
徴せざるべからず此書日本國民の特性の何
たるかを説き建國以來その特性を發揮せる
人を選びて其面目を描き日本國民の前路に
光明を與へ敎訓を與ふ一風變はれる日本國
民の歴史也兼ねて道德經也。

大町桂月先生選

再版 時代青年文集

定價四十錢 郵税金六錢

世に活氣あり情熱あり純潔玉の如きは青年
にして青年は實に時代の花也火也當代の文
豪桂月先生最も青年を愛し指導敎訓須臾も
懈らず爰に滿天下青年諸子の傑作數千篇中

帝國夏目先生序
大學上田先生序
教授ロイド先生文

チャールスラム原著
文學士 小松武治譯

近刊 續沙翁物語集

定價七拾錢 郵税金八錢

譯者曩日沙翁物語十篇を公にして世間の好
評を博し期中ならずして第六版を重ねるに
至れり今又更らに自餘の十篇を譯集して續
沙翁物語集を篇す各篇悉く名什譯筆例によ
りて明快加ふるに細密なる註解を施して讀
者の便益を計れり

文學士 久保天隨著

近刊 文壇獅子吼

定價參拾五錢 郵税金六錢

博大精該の才識を以て、不偏不黨、文壇の
趨勢を論斷し、毫も顧慮するところなきは、
評論家としての著者の態度なり、その問題
は、文學・史學・宗教・道德の諸方面に亘り、
虬龍の片甲、なほ能く雲を成す。一卷收む
るところ、凡そ七八十篇、長短錯落、理致あ
り、情趣あり、眞個人間稀に見るの好文。

より其尤なる者を抜き厳正なる批評を加へ
て時代青年文集一卷を編せらるる收むる所叙
事抒情あり論說書簡あり將た新體詩あり咸
な絢爛花の如く情熱火の如し以て青年の煩
悶を醫すべく元氣を鼓舞すべし附録には文
壇の一大疑問たる夏目先生の「一夜」を始め
當代諸大家の名篇を添へて錦上更に美花を
飾る

東宮侍講 本居豊頤先生著

近刊 紫文摘英

定價四十錢 郵税金八錢

源氏物語が千古の大文學たるは今更贅言を
要せず而も之を教科書に使用せむには餘り
に浩濶に過ぎ又事實に悖倫非徳の箇處多く
女子敎育家の齊しく遺憾とするところ源氏
博士の稱ある本居先生大に之を慨し五十
四帖を通じて其の英を摘み薈を去り最も聯
絡と校訂に意を用ひ「紫文摘英」巻を編せ
らる即ち是れ源語全篇の縮圖にして一讀其
大意を窺ふ是れ併も紫文の妙は此一卷に盡
くせり各種女學校の良教科書たるは勿論尙
も國文學に志あるの士女は必ず一本を備へ
ざるべからず乞ふ高讀の榮を給へ

文學士 久保天隨著

再版 美文 夕紅葉

定價三拾五錢 郵税金六錢

著者の美文は、潑墨の山水の如く、氣韵生
動、豪宕の氣、筆端を繞り、か、蝶、莖、を歌
ふ底の軟弱文字に非ず。三生石、高遠城の
如き、事すでに奇に、文亦た雋、人をして、
覺えず、起舞せしむ。韻文には、坂、を、
の歌、蒙古の大英雄を謳歌し、一唱宛、
肉躍る。唯だ本書に於て之を觀るべし。
細越夏村著

新刊 靈 笛

定價參拾五錢 郵税金四錢

日光暉々の野を、深き水の行くを見ずや。
水面は煌爛として、金波銀波何ぞ燦々の極
みなる。然れども、想へ、十尋の底、油々
して遅行する流の何ぞ夫れ幽冥なるや。
斯の如きは、詩人夏村の胸腔に澎湃する詩
想の注流なり。耳を洗ふ可く、芳草岸頭、清麗
の水面に、深底の音を澄ます者は、水波
自然の「靈笛」の奧秘なる樂韻を聴かむ。

姉崎博士序 萬朝報記者茅原華山著

五改 版册 向上の一路 定價參十錢 郵稅六錢

向上一路に就かんと欲する者は此書を讀
め我國に於て哲學的社會主義を建設した
るは此書を始めとす▲安部氏の駁論及著者
の駁論は益々新社會主義の本領を發揮し
共々光彩陸讀たり▲近時の大著述にして
情理該ね臻る者は此書なり敢て江湖の讀書
子に勸む
大町桂月先生 中内蝶二先生合著

版六 少女と山水 定價參拾五錢 郵稅金六錢

人生の美凝つて少女に在り自然の美凝つて
山水の優婉にして可憐蝶二君の艶麗の文
の嬌態を描きて筆底に脂粉の氣あり桂月
女の洒脱の文山水の幽趣を寫して雲煙紙表
に浮動す双々相對して作者各得意の筆致を
縦にし高尚優雅家庭の讀物ともすべく軍國
の手に高尙優雅家庭の讀物ともすべく軍國
讀者諸賢幸に這般清麗の文字に接して宇宙
の美を味ひ給ふべき也

文學士 大町桂月著

版七 わが筆 定價四拾五錢 郵稅六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に眞理あり教訓
あり才氣あり覇氣あり或は酒脱にして寸鐵人
に或は眞面目に或は談詠に短くして貫く人
を刺し長くして萬馬野を走る而かも貫く人
一脈の氣と熱とを以てし行るに靈活の才筆
を以てす家庭學校社會及び文學等に關する
卓見到處に充ち才情擲すべき美文もその
間に光彩を放つ天地間有數の快文字也
大町桂月先生序 角金潮聲著

版參 宇宙と人生 定價貳拾五錢 郵稅金四錢

宇宙と人生の問題豈常人の言ひ易き所なら
んや茲に哲學者あり宇宙の幽を闡き玄を究
め森羅萬象の生滅變化の本源に溯りて人生
の眞諦を内觀直視せんとす茲に詩人あり天
地の美を捕捉せんとす本書は哲學者の想を詩
人の直観を文に綴りしもの古高の韻、艶麗の
致、讀者をして三嘆せしむ宇宙と人生とを
謳はんとする者は來りて本書を繙け

山口先生序 シルレル原著 齋木仙醉譯

新刊 接神術 定價貳拾貳錢 郵稅金四錢

天師と稱して大聖伏羲の古道を唱導する著
者が、詩人シルレルの雪の如く皓く月の如
く幽に、花の如く艶なる、理想の一卷、接
神術一名神智學なるものを譯して、聖靈は
神母なりとの大論斷を試む、確かに思想界
に大波瀾を起すべき著、殊に世界の百大詩
人の母心を讚美せる百人一首を附録として
東郷大將母堂に捧ぐ、苟くも文藝に志ある
少女は之を讀まざるべからず
文學士 大町桂月先生書翰 木村鷹太郎先生書翰
文學士 上田敏先生書翰 岩野池鳴著

新體 夕潮 定價參拾五錢 郵稅六錢

著者の詩冥遠幽邃、深く多大の情熱を藏し
て、うちに無窮の悲觀を備ふ而してその行
文自在の調、激して豪健奇抜の想を構へ、
沈んでまた可憐の情を寄す、海に向つて、
尙も久遠の感慨あるものは來つて、この冥
想的詩人の「ゆふ潮」を一讀せられよ、

海老名彈正先生著

版七 宗教々育觀 定價五拾五錢 郵稅八錢

宗教界の明星として名聲天下に轟ける海老
名先生は本書に於て教育問題に關する所信
を告白せられたり其滿天下の耳目を聳動す
るに足るものあるや必せり見よ先生が該博
の識公明の論一讀人をして快刀思想界の亂
麻を截つるの感あらしむ而かも本書の内容は
單に教育問題に限らず廣く宗教の根本義に
對する先生最近の思想を發表せられたるも
の實に濃々たる我邦思想界に於ける一大探
海燈たるや疑を容れず大方の識者請ふ刮目
して本書の光燭に接せよ
匿名隱士著

版七 破天論 定價參拾錢 郵稅四錢

天下を風靡したる天人論に對つて逐條討議
的に堂々駁論を試み三一哲學の宇宙觀と人
生的観を鼓吹したる壯快の書也本書の出づ
るや全國各新聞雜誌の大好評を博せり以て本
書が如何に愛讀せらるゝかを印刷せり以て本

綱島梁川著

再版 梁川文集

定價 金貳圓廿五錢
郵税 金拾五錢

上製總クローズ 頁數約千頁頗美本
梁川綱島先生、其高邁博大的識、精嚴理到の言、恰も燭を把つて照すが如し、されど先生は談理是れ能とする學究に非ず一面冷靜細緻の頭腦を備へたる倫理學者にして他面別に抑ふ可らざる詩人の熱情を宿して天他を戀ひ此戀を湛へて日夜に瞑想し且暮に修養止まざる哲人也解脫の人也、理を談ずれば簡淨にして靈活、感興を遣れば深遠にして豊麗、其想獨特、其文獨特、鬱然一家を成して現代思想界の一角に抜く可らざる自家の領を占めて妄に他人の追従するを許さず、是れ筆に非ずして人格なれば也、弊堂幸に玉稿を請うて上梓するの榮を得たり敢て先生の高風を慕ふ所の諸君子に薦む。

山口先生題詩 蘆風秋元喜久雄譯

訂正 四版 詩粹 紛紅集

美術的製本
定價 卅五錢
郵税 四錢

ゲーテ、シルレル、ケルナル等獨逸の七大詩人が金玉の佳什を選び、之を流麗精眞なる筆を以て、翻譯したるもの、一字一句の細と雖ども、悉く原詩の美を顯はして遺さず。收むる所、清美なるあり、優婉なるあり、風雅なるあり、艶麗なるあり、例へば飛紅紛々として、蒼勁たる香氣、人を酔はしむるが如きもの集つて皆此中に在り、別に原詩を添へ對照に便す。

萬朝報記者 茅原華山編纂

青年と詩吟

定價 貳拾五錢
郵税 四錢

人生豈思詩情なかるべけんや「青年と詩吟」は茅原華山氏が各諸先生に囑して各々其愛誦する、漢詩、和歌、新體詩、俳句を撰び編纂せられたるの書日々此巻を抱いて誦せし計るべからざるものなり

岩野泡鳴著

新體 悲戀悲歌

定價 參拾五錢
郵税 金四錢

著者の詩既に世に定評あり、その久遠無窮の悲觀、常に高遠幽邃なる冥想を経て、廣く人間界の煩悶を靈化する、蓋しこれ時代の詩界に獨得の地歩を占むるもの、而して「想の詩人」一海の詩人「今やまた」人間界の詩人「と呼ばんとす、向上か墮落か、乞ふ、この『悲戀悲歌』を見て、之を判じ給はんことを

高橋五郎著

杜伯品藻

定價 卅五錢
郵税 六錢

トルストイ伯の主義人物を評す一言一行一動一靜天下の毀譽賛斥を招致すトルストイ伯も亦豪傑なる哉之を見ること或者は神の如く或者は鬼の如く著者此世界主義的博愛的絶對愛他的極端非戰的偉人物を四方八面より縱横論評し玲瓏玻璃屋に住する如し其媚妍得失一目瞭然眞理の爲に之を論ず豈唯敵國の偉人として之を評鑑する而已ならんや◎讀書子愛讀の榮を賜へ

文科大學 夏目先生校閲 チャールズ、ラム著
講師 上田先生序文 文學士 小松武治譯
ロイド先生

訂正 六版 沙翁物語集 定價 七十錢
郵税 十錢

上製クローズ 四百頁頗る美本
古英雄亞歷山陣中に在りて常にホーマーを誦し那破倫大帝兵馬の間、手、ゲーテを繙かざることもなかりしと聞く戰勝國民豈に文界の巨璧シエロクスピアを讀むの餘裕なくして可ならんや本書は沙翁戯曲中最も有名なる四大悲劇四大喜劇に加ふるにロマオ、ジュリエット及冬物語等通じて十編の物語を抜萃し精緻なる翻譯を試み懇到なる註解を施し加ふるに數種の附録を以てす。特に文科大學講師先生の校閲を仰ぎたる者にして尙も沙翁戯曲の何たるを窺はんと欲するの士は須らく一本を購うて座右に備ふべきの書也

海老名彈正先生著

再版 基督教本義

上製 六十五錢
並製 五十五錢
郵税 八錢

基督教の本義果して如何之れが明白なる解
答を與ふるもの古來宗教史上に光明を放て
る豫言者牧師教祖の抱懐せる思想經驗に依
らざるはなし本書は基督教界の明星海老名
彈正先生卓抜の識勇健の筆を以て上はモ
ゼより下ルイテル、シユライエル、マツヘル
に到る迄正確に偉人の悟得を明かにし斯教
の本義を説明せられたるもの也幸に愛讀の
榮を賜へ

齋木仙醉先生譯

トルストイ教訓小説集

定價 金拾錢 郵税 金四錢

トルストイの宗教論、人作小説、海に
是れ雄渾なる革命の聲也、凄壯なる大煩悶
の聲也、思ふに渠が現世界の最大文豪たる
所以蓋し茲にあらん、然れども人は狂瀾怒
濤を壯とするに共に、湛然一碧の湖水を樂

海老名彈正先生著

人道

定價 拾錢 郵税 貳錢

先生時局に關し大に感慨するところあり豫
言者的熱誠を傾盡して雄渾壯大萬丈の光焰
を吐き以て日露戰爭の意義を高め國民の元
氣を鼓舞作振せん、と欲す當に軍國々民の必
讀書たるのみならず軍隊慰問用の好冊子な
り、廣く世上の需要に應せん、とす幸に陸續御
注文を賜へ

加藤直士譯

トルストイの日露戰爭觀

定價 金拾錢 郵税 金四錢

露國の巨人トルストイ伯が今回の日露戰爭
に關して如何なる意見を抱きつゝあるかは
何人も知らんと欲する所なり然るに伯は倫
敦タイムズに於て「日露戰爭觀」と題する一
大論文を掲げて最も雄渾痛切に其詳細なる
意見を発表したり、今や邦人鶴首して其内容
の全斑を知らんと欲する時に際して其紹介
者を以て有名なる加藤先生に請ふて其全篇
を譯述し以て刻下の讀書界の饑渴を癒さん
と欲す請ふ愛讀の榮を賜へ

しまざるべからず。深林巨巖を賞するに共
に、鳴禽野花を愛せざるべからず。本書は
即ち後種の渴望を充たす處の光明の書也。
讀者若し之を繙かば、鬢髮雪の如き老文豪
が、如何に諄々として、天使の如き聲を以
て、博愛、自然、自由、勞働の大々的福音を鼓
吹するかを視ん。

苦學社編輯

苦學の伴侶

定價 參拾錢 郵税 四錢

生活の道に往き難める苦學生は此の書を讀
め此の中に安慰と光明とを得ん堂々たる我
國現時の諸大家の成功の秘訣を知らんとす
る者は此の書を讀め此の中に諒々たる師父
の警咳に接することを得ん嗚呼苦學嗚呼苦
學古今誰か苦學せずして成功したる者やあ
る、苟も學生にして苦學の心得なき者は忠實
なる學生と謂ふこと能はず然れば此の書は
學事に志せる總ての青年男女の好伴侶たり
と謂ふべし請ふ一本を座右に供せられんこ
とを

横山筆助著

再版 催眠暗示術 應用自在

定價 參拾錢 郵税 四錢

近時催眠術の書物多々出版せらるゝと雖ど
も大抵不充分の譯書、實際に益なき空論
的なるもののみ多し、之に反して本書は經
験に經驗を積みたる斯學の老練家が、最新
の學理と諸種の方法とを參考して何人にも
理解し得るやう又極めて懇切に述べられた
るものなり、且つ加ふるに興味ある實驗書
を以てす、本書出で、我が催眠術界の知識
をあらんことを

茅原華山編纂

我ど人

定價 貳拾錢 郵税 六錢

本書は世間の好評を博したる「向上の一路」
生命一體篇を別冊と爲したるものにして萬
朝報の黒岩先生を始め諸家の談論文章を筆
録したるものなり、柳は緑花は紅、是書を
讀めば諸名家と共に一堂春風の中に座する
の感あるべし

鈴木秋子女史著

軍國の婦人

定價廿八錢
郵税四錢

戦争の裏面に婦人あり戦争は男子のみにて
なすものと云ふものは未だ以て今日の時局
を語るべからず本書は實に婦人戦時に於て
なすべき活動の方法及び戦争と婦人との天
職を説きたるものにして事勢に適切なる事
は勿論苟も婦人にして自己の修養發達を力
むるものは必ず一讀せざるべからざるの書
也

基督教講壇集

定價七十錢
郵税八錢

本書は眞に生命の麴麴靈活の根原たる現代
基督教界のあらゆる大家の説教を網羅掲載
したる雑誌講壇の全部を合し改冊せしもの
なり居ながら各大家の口演を聴問する好冊
子其内容に於ては活水如湧の感あり乞ふ愛
讀の榮を給へ

杉山先生書簡 黒澤辰三郎編

新刊 日本名家手簡

定價金拾錢
郵税金六錢

世に立つて事をなさんとするもの先づ書翰
文に熟達せざるべからず書翰文に熟達せん
と欲するもの先づ先輩の往復文を研めざる
べからず、是れ本書の出る所以なり本書收
むる所我國大家の模範文に附するに各其小
傳を以てし並に書簡文の變遷を明にす、苟
くも當世の活舞臺に雄飛せんとするものは
男女を論せず一讀せざるべからず



150